

「隣人」

出エジプト記 22章20節～26節
ルカによる福音書 10章25節～42節

説教 朴 憲郁ほんうく牧師（東京神学大学名誉教授）

聖書は平和をもたらす人間の最も基本的な生き方のメッセージを、平和の主であるイエス・キリストの神との関係の中で、「隣人」を巡って告げ知らせます。

今朝のルカ福音書の御言葉の第二段落となる38節以下によれば、せわしく動き回る姉のマルタではなく、座ってじっと御言葉に耳を傾ける妹のマリアの姿勢に倣って、主の御言葉を心に受けとめる時、そこに他者と共に生きる平和の源泉があります。そこから自ら人の隣人となるために善き業を行う道が開かれます。御言葉を聞くことと行うことが一つであることを、主イエスはルカ福音書8章21節でおっしゃいます。

人が限りある地上の命を越えて、永遠の命を得るには、永遠の命の源である神の御心を行い、それに相應しく生きることが求められます。ですから、イスラエルの民は神の御心である律法の中心的な教えを心に刻んで、それを実行することに努めました。それが、イエスとイエスを試そうとする律法専門家との間で確認された27節の言葉（申命記6章5節の引用句）。その言葉は大人だけでなく、子供も徹底的に守って神を心から愛し、神の祝福と永久の命が約束されました。

主イエスとの問答で、律法の専門家は27節でこの申命記6章の言葉を適切に答えた時、その答えに加えて、主イエスは彼に求めました。「隣人を自分のように愛しなさい」と。神を愛することが隣人を愛する行為と密接に繋がっていることを、神の民は忘れることがありませんでした（レビ記19章18節の戒め）。異邦人を排除していた人道的な同胞愛は、その限界を超えて、次第に他民族にまで広がられました（出エジプト22章20節～26節。レビ記19章18節も参照）。

実に主イエスの問いかけに対して、この律法専門家は、心から神を愛し隣人を愛することに全律法がかかっていると、見事に答えることができました。

ところが、「その通り実行しなさい」と言われた時、正しい知識はあっても実行の伴わないあり方を批判されたと感じ取った彼は、自分の非を認めず、憤って自己弁明を始め、逆にこう質問しました。「では、私の隣人とはだれですか」と。

困った人の助け人となり、隣人となる意志をもって行動することが求められる場面に直面しても、腰を上げず、指一本も動かさない頑迷な人間の姿が、一人の頑迷な律法専門家に表されています。私の隣人とはだれかを論じるのではなく、自分と接する人々の＜隣人となる意志＞があるかどうかが問題なのだと、主イエスは一人の善きサマリア人の実話的な（ありそうな）喩えの締めくくりの36節と37節で彼に迫ります。そのようにして私たちにも迫っています。

この例話で興味深いのは、強盗に襲われた人（地方を往来するユダヤ人商人？）の隣人になったのが、同じユダヤ人であっても異邦人の様に扱われたサマリア人であったという点です。つまり、敵対関係にあったサマリア人がユダヤ人の隣人になったことは、平地説教をなさった主イエスの敵愛の戒めを文字通り実行した事例として、このサマリア人の救援行為が見なされていることです。ルカ福音書6章の27節以下の新しい教えがそれです。それを読みますと、この隣人愛は敵愛をも含む徹底的なものであったのです。しかし、敵愛は私たちにとって実行しがたい課題のように思われませんか。

憐れみ深いサマリア人の姿は、教会史の中で繰り返し、キリスト教的隣人愛の模範と見なされてきました。それは最終的に、私たち罪人に対する神と御子キリストの憐れみ深い愛にその根拠がありました。代々の教会の教父たちは、他の様々な寓意的解釈と並んで、このサマリア人の中にしばしばイエス像を見ました。つまり、ユダヤ人たちが敬遠し敵対していたサマリア人が、深く傷を負った一人のユダヤ人を憐れんで救出し、癒した姿は、キリストがご自身に敵対する人間に、十字架の死に至るまで愛と憐れみを差し伸べてくださったことを指し示しているということです。これは、まことに適切な解釈であると言えます。ですから、キリストの徹底した敵愛の憐れと愛によって神と人の前に立つことを赦され、生かされた人間は、神への心からの感謝と喜びによって、神を愛し人を愛する者へと変えられていきます。ひたすら愛の福音を聞き入れた者こそ、今や愛の実践に励みます。

（記 朴 憲郁）